

氏名	下斗米 淳
生年月日	
本籍	東京
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	人博乙第1号
学位授与の日付	平成19年3月22日
学位授与の要件	論文博士(学位規則第3条第4項)
学位授与の題目	対人関係の親密化と自己変容との連関過程：3位相説からの理解 (Conjoint process between development of interpersonal relationship and change of self-concept: Three phases theory)
論文審査委員	委員長 山形 恭子 委員 松川 順子, 岡田 努 小島 治幸, 萱原 道春

## 学位論文要旨

本論文は、対人関係の親密化と当事者の自己変容を生み出す心理機構を検討するための理論的枠組みとして、3位相説を提唱した。そして、親密化動態と自己変容とを連関させる心理機構が対人関係に内包されている可能性を実証的に示し、3位相説の、今後のモデル構築に向けた理論的枠組みとしての有用性を示すことが全体の目的であった。

まず第1章「対人関係の親密化」の社会心理学的研究においては、対人関係に関する従来からの理論的視点を検討した結果、対人関係の親密化の動態を理解する上で、自己開示、類似・異質性認知、役割行動の分担という3つの心理事象を位相として、交換原理に基づく相互依存性レベルの観点から漸次的に変化していく過程として捉えることの必要性を論じた。そしてその結果を踏まえて、対人関係の親密化過程を、「自己開示の交換を通して徐々に明らかにし合った両者の類似・異質点に基づいて、現段階における課題解決に利する特定な役割行動を遂行するように期待し合い、当事者間の相互依存性レベルを高め影響力を増していく過程」と定義づけた。

その上で、この3位相から対人関係の動態を捉えていくと、対人関係の親密化とは、この3位相が、当事者間で必然的に生起する葛藤に際して循環しながら、当事者間の相互依存性レベルを高めていく過程として記述できると考えられた。さらに、親密化過程で必然的に生起するであろう葛藤事態において、3位相が再び立ちあがることから、当事者の自己が影響を受けて変容する可能性も想定できる。対人関係の親密化過程を3位相から捉え直すことにより、従来の静態的な記述レベルから、対人関係がシステムとして親密化していくという力動的な過程が導出でき、また、親密化動態の理解に寄与するだけでなく、対人葛藤を介在させて、対人関係の親密化と自己変容との連関関係を描出することが可能になるという点で、自己変容にも議論の拡張できる可能性を指摘した。

本論文では、このような有用性の期待できる現象記述的枠組みを3位相説と呼ぶこととし、その有用性の実証を本論文全体の目的とすることが述べられた。

そこで第1部『対人関係の親密化動態』においては、対人関係の親密化過程に3位相を仮定することが妥当であるか否か、そして対人関係の親密化過程が対人葛藤を必然的に生起させる心理機構を有していると考えられるか否かを、全体として検討した。

第2章「相互依存関係の予期が自己開示・秘匿意向に及ぼす効果」ではまず、3位相のうち最初の

位相として仮定される自己開示について、他者との相互依存的関係の差異が自己開示及び秘匿を規定しているか否かを、質問紙調査により検討した。先述の定義に従えば、自己開示やあるいは逆に自己の秘匿には、この相互依存的関係の構造に応じて特徴的差異が見出されるものと想定できる。検討の結果、予想の通りに、自己の開示と秘匿は、将来の相互依存関係の構造に応じて様相を異にしていることが見出された。とりわけ、明らかにされた特徴的差異からは、社会的統制機能のもと印象管理の方途として自己開示と秘匿が方向づけられていることが窺われた。この結果は、自己開示が、役割行動の分担に基づく相互依存性を構築するために適切な類似・異質性認知が図られるよう機能していることを示している。

第3章「対人関係の親密化に伴う自己開示と類似・異質性認知の変化」では、対人関係の親密化過程に応じて、自己開示と類似・異質性認知が連関していると言えるか否か、また、最終位相である役割行動の分担に応じていかなる連関関係が観察され得るのかについて探索し確認することが目的であった。質問紙調査の結果、自己開示と類似・異質性認知の間に連関関係が見出され、親密化と共に異質性認知も促進されていくことが確認できた。この結果は、親密化過程において役割行動の必要性が顕在化されるようになることに伴い、自己開示を通して異質性認知が促進されていく動態を示すものと言えよう。

第4章「対人関係の親密化過程における役割行動期待の変化」においては、役割行動に関する実態調査から、親密化過程における各段階の相互依存性レベルの定常的狀態を検討した。その結果、対人関係が親密化していく過程には、その段階間で役割行動の期待度と役割行動間の連関パターンが異なっていることが見出された。そして、初期には不特定多数の者にも受け容れられているような社会的規範を基準に、そこからの逸脱によって損失を過度に与え合わないようにする程度の相互依存性レベルを達成することが課題とされるのに対して、中期以降になるほど、当事者間で独自の課題が内生され相互依存性レベルも高くなっていく傾向が窺われた。親密化過程では、異なる役割分担に基づいて相互依存性が質的に変わり、また、内生された課題を解決する必要性が増すという点で当事者間の相互依存性レベルも全体に高まっていくという、一連の動態変化が記述できた。

第4章では、親密化過程における課題の変化と段階間での役割行動の差異を検討したに過ぎなかった。3位相説を踏まえると、課題の変化に伴いこれまで分担されてきた役割行動が機能不全を起し葛藤が生じ、現行の役割行動の再分担が行われなければ、当該関係の崩壊に至ると考えられる。従って、対人関係の親密化には、葛藤が生起し、現行の役割行動の見直しが行われることを確認する必要がある。第5章「友人関係における役割行動の再構築と葛藤」では、僅か9ヶ月の縦断調査ではあったが、その間にも役割行動への期待が一時的に弱まる時期があり、その後も続く関係で再び期待が回復する様子と、また一時的に期待が弱まる時期に葛藤も確かに多く起こっていることが示された。しかしまた、役割行動への期待が一時的に弱まる時期においても、当事者の親密感が低下しないことも確認された。

3位相説に従えば、例えば顔見知り、友達程度、あるいはまた親友というように段階毎に解決を図らなければ当該関係を維持し得ない固有の課題があるために、より親密化した段階へと関係が移行する際、新たな課題に直面して現行の役割行動が機能不全を起し葛藤となる。従って、段階間で課題が異なるために、当該関係の崩壊の危機として顕在化しやすい機能不全を起さず役割行動にも違いがみられるはずである。第6章「対人関係の親密化過程における葛藤事態の顕在化」では、この仮説の正否を検証した。質問紙調査の結果、3位相説で想定された通りに、親密化過程においては、役割行動への期待と遂行とのズレに基づく満足・不満足感及び葛藤事態の生起が一様ではないことが示された。すなわち、親密段階に応じて葛藤原因として顕在化されやすい役割行動と顕在化されにくい役割行動が異なるとの仮説が支持された。この結果はまた、'喧嘩するほど仲が良い'と言われる通りに、親密化過程自体に対人葛藤を生起させる可能性があることを示唆している。

以上第1部では、従来の対人魅力研究や親密化過程における静態的な記述研究とは異なり、3位相

説に基づくことで、対人葛藤に伴う関係崩壊の危機が対人関係をさらに親密化させる契機になり得ること、及び対人葛藤を介在させて対人関係には自らが親密化していく動態を仮定することが、可能であることを示した。加えて、この3位相説が、自己開示という行動面や類似・異質性認知という認知面だけではなく、当事者に喚起される満足・不満足感という感情面にまで広く言及していけるものでもあることを示した。

これら対人関係の親密化過程の動態に関する検討に対して、第2部『自己概念の変容と安定性』においては、全般に、対人関係を結ぶ当事者の既有自己概念の維持や変容の問題が具体的に扱われた。親密化過程において、3位相が再び立ちあがることに伴う自己への影響の問題を検討しようとするものであった。

まず、「第2部のはじめに：問題の整理」においては、葛藤に際して再び立ちあがる3位相のうちの最初の位相である自己開示を、当事者にとってかつて開示された既有の自己概念に対して、それと不整合な評価を相手からフィードバックされる事態という社会的文脈の中に位置づけて検討していく必要のあることが論じられた。

その上で第7章「社会的フィードバックが受け手の自己概念変容に及ぼす効果」では、不整合フィードバック事態において、その受け手の自己概念に及ぼす影響力を実験により検討した。その結果、まず、この事態において自己概念への変容圧力が強いことを確認した。またそこで論題とされる特性に関する自他間の差異を認知し合おうと、当事者は動機づけられことも示された。不整合フィードバック事態において、自他間の差異を認知するよう当事者に動機づけが高まるという知見は、対人葛藤に際して3位相が立ちあがるとの仮説に対して傍証を与えている。また、不整合フィードバック事態において当事者の自己概念にその変容圧力が強いとの結果からは、対人葛藤を必然的に生起させている親密化過程に対してさらに、当事者の既有自己概念が変容を促されやすくなる可能性を想定させるものである。

そこで第8章「社会的フィードバックの対処方略とその選択における規定因」においては、この不整合フィードバック事態のもとで、人のとるであろう対処行動を実態に即して広く収集し、それぞれの行動への規定因について、質問紙調査によって検討した。その結果、多様な対処方略の中でも、親密な関係性にある相手を評価の源泉とする時、確かに受容が採られやすく、逆に変容に抵抗するバイアスが喚起されにくい傾向が認められた。そしてこの知見に基づき、既有自己概念の安定性に対する人の動機づけがあっても、それ以上に強い自己への影響力を親密化過程が及ぼすものであることが確認できた。

このように、親密化過程において、当事者の既有自己概念は強い変容圧力を受ける可能性のあることが示された。しかしながら、既有自己概念の変容様態にはさまざまなものが想定される。従って、親密化過程において特徴的な変容様態を検討することは、親密化と自己変容との連関関係が見出される範囲を特定化するという点において、重要な研究課題とされよう。第9章「対人関係の親密化過程における自己概念の変容様態」では、この問題を解明していくために質問紙調査による検討が試みられた。

その結果、まず第一に、広く社会的相互作用場面において、既有自己概念の影響の受け方を類型化したところ、自己概念の影響の受け方は、自己高揚、自己体系化、自己混乱、自己発見、自分らしさの了解、という5型に整理されることが見出された。この結果はまずもって、社会的相互作用場面における自己概念への影響を問題とする際には、変容か否かの相互背反的事象として扱うのではなく、いかなる変容かが詳細に問われていく必要のあることを示している。そしてさらに、自己体系化と自己発見が、他の3型に比べて、特に自己の発達と呼び得る大きな影響の受け方であることが示された。自己全体の構造の大きな変化や自己に関わる新たな理解が、社会的相互作用場面において生起することが、実証された。第二に、対人関係内で当事者が道具的機能を果たすようになっていくほど、この自己変容を意味する自己体系化や自己発見が生起しやすいことを確認した。このことから、親密化

動態を生み出す心理機構が、また同時に当事者の自己変容を促進する機能を果たしていると考えられた。親密感と自己体系化及び自己発見の生起との間に有意な相関が認められた結果からも、親密化と自己変容とは、先述の心理機構を介在させたかたちで連関していることが窺われた。

第10章「総括」では、8件の実証研究結果を踏まえ、3位相説の妥当性及び有用性が議論された。研究知見を総括した結果、対人関係の親密化過程を3位相説から捉えることにより、対人関係は自らの動態として、葛藤を生起させることを通してさらに親密化した状態に推移していく過程をたどっていく可能性が指摘できた。そしてまた、この動態を生み出す心理機構が同時に、当事者の自己に変容を促す機能をもつことにもなっていると結論づけられた。その上で、3位相説の理論的枠組みから想定された心理機構をモデル化していく上で必要とされる研究課題を指摘し、今後の研究の方向づけを示した。

### Abstract

'Three phases theory' of close relationship was proposed. The main proposition of this theory is that the interdependent level of personal relations is increased while three phases, which consist of self-disclosure, similarity-dissimilarity perception and assignment of role behavior, is circulated by conflict in the personal relation. As a whole, eight studies based on this theory showed that in personal relations, conflict with the partner inevitably arose, and this conflict mediated development of interpersonal relationship and change of self-concept and then combined both. These results produced an important hypothesis that interpersonal relation had the psychological mechanism made this conjoint process between development of interpersonal relationship and change of self-concept. The usefulness in theoretical and practical implications of 'three phases theory' and the orientation in future research about dynamics of close relationship was discussed.

## 論文審査結果の要旨

### 【本論文の意義と成果】

下斗米論文は社会心理学における対人関係の親密化過程を綿密な実証的研究に依拠して以下の2点において理論的に発展させ、新しい包括的な理論枠組みを提唱している。

(1) これまで静態的に捉えられてきた対人関係の親密化過程を自己開示、類似性・異質性認知、役割行動という循環する3位相から動態的に捉える理論的枠組みを新たに提起し、3位相説に基づいて対人関係がシステムとして高次の相互依存性レベルへと推移する力動的な様相を明らかにしている。さらに、(2) これらの対人関係の親密化における動態を拡張して、自己概念の変容が親密化過程の動態のなかで生起する葛藤を契機としてもたらされることを不整合フィードバック事態で示し、これまで個別に研究されてきた対人関係の親密化過程と自己概念の変容過程を統合する斬新な視点を提唱している。さらに、その際に自己概念の変容を規定する要因とその様態ならびに影響を受ける自己概念の側面を実証的に分析し、この両者の連結関係を明らかにしている。

本論文はこのように理論的に対人関係の社会心理学研究における今後の研究を先導する独創的で包括的な理論の構築を提起しており、この分野の研究を飛躍的に発展させる、豊かな可能性を孕んだものとして高く評価される。しかしながら、本論文はこうした理論としての有効で有意義な側面にとどまらず、8つの精緻な実証的研究を通じて対人関係の親密化過程ならびに自己概念の変容に関する多数の新しい知見を見出している点も特筆すべきであろう。その具体的な研究成果や発見的事実は以下に示す通りである。

本論文は1部第1章で先ずこれまでの社会心理学的研究を踏まえて、対人関係の親密化動態を捉える枠組みとして3位相説を提案している。3位相説では親密化過程を「自己開示の交換を通じて徐々に明らかにし合った両者の類似・異質点に基づいて、現段階における課題解決に利する特定の役割行動を遂行するように期待し合い、当事者間の相互依存性レベルを高め、影響力を増して行く過程」と定義するが、これらの3位相説の理論的妥当性が次の第2章～第6章において実証研究を通じて検証されている。第2章では自己開示と秘匿が将来の相互依存関係の構造に応じて異なることを見出し、さらに、第3章では対人関係の親密化過程に応じて自己開示と類似・異質性認知の間に連関関係が認められること、また、親密化にともなって異質性認知が促進されることが明らかにされている。第4章では対人関係の親密化過程における相手の役割行動期待に着目して、質問紙調査から6種類の役割行動型（支援性・自律性・類似性・娛樂性・近接性・力動性）が抽出され、それらが親密化過程の段階で変化することが明らかにされている。本結果に基づいて親密化の段階間で役割行動への期待に差異が見られること、さらに、このような差異を生じさせる背景として親密化段階に応じて課題の変化が想定されることが指摘されている。これらの結果を踏まえて、課題の変化にともなってこれまで分担され、期待し合ってきた役割行動が機能不全を起こして葛藤が生じ、役割行動の見直しが行なわれることが予想されている。そこで、第5章ではこの予想を検証するために、9ヶ月間の縦断研究を友人関係においておこない、役割行動の見直しにともなって役割行動への期待が一時的に低下する時期があること、そして、そのような低下の時期には葛藤が多く生起することが明らかにされている。しかし、9ヶ月の間に親密感が強くなることも認められたことから役割行動の見直しと再構築がおこなわれていることが示唆されている。第6章では親密化段階に応じて対人葛藤を生起させている原因としての役割行動が異なるか否かが検討されている。対人関係の崩壊の契機となる葛藤の生起可能性に関して、役割行動の期待と遂行とのズレによって喚起される満足・不満足感と実際の葛藤事態の両者を調べて、これらが親密化過程の段階で異なることを見出している。この結果は親密化の段階に応じて葛藤原因として顕在化されやすい役割行動と顕在化されにくい役割行動があることを明らかにしており、対人葛藤にともなう関係崩壊の危機が対人関係をさらに親密化していく動態が3位相説に基づいて示唆されている。

2部第7章～9章では上記の対人関係の親密化に関する3位相説を拡張して、対人関係を結ぶ当事者の既有自己概念の維持・変容に焦点を当てた研究がおこなわれている。第7章では自己開示の位相において初対面の他者から既有自己概念と不整合な評価をフィードバックされた場合に自己概念の変容が生じることが示されている。さらに、第8章では親密な関係にある他者からの不整合な評価の効果とその場合に見られる対処行動の実態が吟味されている。質問紙調査の結果から、9つの対処行動（受容・評価回避・要素付加・比較・説得・疎遠化・表面的同調・情報収集・反評価的態度の誇示）が因子分析を用いて抽出されているが、こうした多様な対処行動のなかでも、親密な関係にある相手からの評価を源泉とする時に受容が採られ易く、逆に変容に抵抗するバイアスが喚起されにくい傾向が認められている。この結果から、人は既有自己概念の安定性に対する強い動機付けをもつものの、それ以上に親密化過程が自己への強い影響力を及ぼすことが実証されている。第9章では第8章で見出された親密化過程における既有自己概念の変容の可能性を自己概念の変容様態を明らかにすることから具体的に把握している。質問紙調査から、社会的相互作用場面における既有自己概念の影響の受け方を因子分析によって類型化して、自己高揚・自己体系化・自己混乱・自己発見・自分らしさの了解の5型を見出し、特に自己体系化と自己発見が自己変容を促進する影響の受け方であることが明らかにされている。また、対人関係の親密化のあり方と自己概念への影響の受け方との関連性を調べたところ、両者の間に有意な相関が見出され、親密化過程と自己変容との間に連関関係が見られることも実証されている。この結果は社会的相互作用場面において自己概念の理解や変容が生起すること、そして、対人関係における親密化動態を生み出す心理機構が同時に当事者の自己変容を促進する機能を果たしていることを明らかにしている。

本論文の8つの実証研究はいずれの研究においても興味深い、新しい発見的事実を見出しているが、特に、役割行動の類型化、葛藤にともなう自己概念の変容、不整合な評価をフィードバックされた場合における対処行動の類型と自己変容様態を解明した研究結果は有意義で重要な知見と捉えられる。

#### 【今後の課題】

本論文では対人関係の親密化過程に循環する3位相が想定され、親密化の発展過程が力動的に明らかにされるとともに、そのような親密化の動態のなかに葛藤が自ずと生じて3位相の循環がもたらされることが指摘されている。しかし、本論文ではそうした循環をもたらず規定要因に関しては具体的に解明されていない。今後、不整合な評価事態や葛藤事態においてこうした3位相の循環を促進・阻害する要因を詳細に明らかにし、本理論を一層精緻化して洗練することが求められよう。また、本論文では対人関係自体に親密化する内生的側面が存することを強調しているが、親密化過程は他者を親密な相手と捉えて、そのような態度が形成され発展する過程とも見なすことができよう。こうした態度形成の枠組みの下では態度の認知・感情・行動の3成分を考慮することが必要であろう。本論文では自己開示・役割行動の行動成分、類似・異質性認知の認知成分、満足・不満足感の感情成分を取り上げられているが、個々の成分の包含する範囲や3成分の関係についても今後分析することが要請されよう。さらに、本論文では同性の大学生を調査対象として親密な2者関係に焦点を当てた実証的理論研究がおこなわれているが、対人関係の親密化過程を究明して理解するにはかなり限定された対象や関係に焦点を当てているといえよう。本論文で提唱された理論がこれらの対象や関係を越えて、生涯発達における対人関係や多様な人間関係を説明する理論として適用可能であるのかを広く吟味していくことも今後の重要な課題であろう。

#### 【審査結果】

以上のことを総合的に判断して、本審査委員会では、審査委員全員一致で下斗米論文を博士（文学）（乙）を授与するにふさわしい論文であると判定した。